Kwansei Gakuin University

——書　評——

Mark Blaug, *A Methodological Appraisal of Marxian Economics.*

North-Holland Publishing Company, 1980, ix+82 pp.

松　本　有　一

I

1970年代は欧米におけるマルクス・ルネサンスといわれた．それはいろんな情況が相互に影響しあって引きおこされたものと考えられる．

経済学にかんしてだけみても，本書でもふれられているように，主流派経済学者の手になる初級のテキストブックにも，マルクスないしマルクス経済学について一章がさかれるようになっているし，マルクス経済学にかんする研究論文がアカデミックな雑誌にも多数あらわれ，マルクス経済学の概説書やアンソロジーが多く編まれている．そして，その広がりは，ますます大きくなってきているように思われる．

本書は，オランダのド・フリース教授基金（the Professor F. de Vries Foundation）による一連の三つの講義からなっている．1954年に設立された，ド・フリース教授（1884—1958）を記念するこの基金にもとづく講義については，これまでに邦訳されているものもあり，よく知られている．本書のはしがきに記されているところによると，「この基金の目的は，オランダでの経済学の理論研究への刺激として，理論的問題にかんする一連の講義のために外国から卓越した経済学者を定期的に招待することである．」

このような目的をもったド・フリース基金が，マーク・ブローグを招いてマルクス経済学にかんする講義をもとめたことは，先にふれたヨーロッパにおけるマルクス経済学への関心の高まりが，決して一部のものでないことを意味しているように思われる（ただし，ブローグによる評価は否定的ではあるが）．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Mark Blaug, *A Methodological Appraisal of Marxian Economics.*

本書の著者ブローグは，経歴や多くの著書などからその多才なことをうかがい知ることができる．改めていうこともないかもしれないが，本書の序言にそって彼の経歴と業績を紹介しておくことにしよう．

1927年オランダ生まれ．1940年イギリスへ，つづいて1942年アメリカへ渡る．ニューヨークで高校，大学教育をうけ，1952年 M. A. を，1955年 Ph. D. をコロムビア大学で取得．

アメリカ労働省で統計官を務め，のち1954年イェール大学の助教授，1962年まで在職．1960—61年マンチェスター大学で経済思想史担当の客員教授，1965—66年シカゴ大学で教育の経済学担当の客員教授を務める．現在，ロンドン大学教育研究所で教育の経済学担当教授．

そのほかブローグは，各種研究機関の評議員やユネスコ，OECD，世界銀行，UNIDO，ILO，フォード財団などの顧問を務めた．またインド（1967年）やタイ（1969年）に住み，アジア，アフリカの開発途上国への多数の国際使節団に参加している．

著書は，主に経済学史と教育にかんするものである．

Ricardian Economics : A Historical Study, 1958.

Economic Theory in Retrospect, 1962, 2nd ed., 1968, 3rd ed., 1978（第一版の邦訳，久保芳和・真実一男・杉原四郎・宮崎犀一・関 恒義・浅野栄一訳『経済理論の歴史』上・中・下，東洋経済新報社，1966—68年，第三版の邦訳は現在刊行準備中）．

Introduction to the Economics of Education, 1970.

Education and the Employment Problem in Developing Countries, 1973.

The Cambridge Revolution : Success or Failure ?, 1974, Revised ed., 1975（福岡正夫・松浦 保訳『ケンブリッジ革命』東洋経済新報社，1977年）．

さらに編著，共著に芸術の経済学，教育にかんするものがあり，経済学方法論にかんする著作の刊行が予告（もしくは刊行済）されている．

II

はじめに本書の論点を簡単に要約しておこう．本書はつぎの三つの講義からなっている．

第1講義　利潤の性質にかんするマルクスおよびマルクス主義者の見解（Lecture 1

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Marx and Marxists on the nature of profit)

第2講義　資本主義の将来にかんするマルクスおよびマルクス主義者の見解（Lecture 2　Marx and Marxists on the future of capitalism)

第3講義　経済思想史にかんするマルクスの見解（Lecture 3　Marx on the history of economic thought)

第1講義はマルクス経済学の論理的一貫性の問題にあてられているが，はじめに一連の講義の主題と方法が明らかにされている．

「この一連の講義での私の主題はマルクス経済学である」(p. 1)[1]．「この一連の講義で私が行なおうとすることは，イムレ・ラカトシュ（Imre Lakatos）の意味でマルクス経済学を評価することである[2]」(p. 1)．

マルクス経済学は比較的広範な科学的リサーチプログラムにはめこまれており，社会学，政治学，人類学などと相互に編みあわされていて，相互に関連した複合体として評価されなければならないといわれる．その際その理論の予言的証言（predictive record）の評価が重要であるが，それにはまずマルクス経済学の論理構造の一貫性が前提となり，第1講義は理論の一貫性の問題にあてられる．

そこでブローグがとりあげているのは，価値の（生産）価格への転化の問題である．「転化問題はマルクス体系の論理的有効性に絶対的に重要である」(p. 4)．「マルクス経済学を，他のどんな種類の経済学からも区別させる特徴的な面は，競争的資本主義はまさに同時に二つの相対価格の集合にしたがうという考えである．その一方は，諸商品に体化されている，すなわち諸商品の生産に必要な直接，間接の労働総量（簡単にいうと『価値』）であらわされ，他方は通常の長期均衡価格（簡単にいうと『価格』）であらわされる」(p. 5)．そして「マルクスが主張したことは，同じ絶対価格の集合と同じ利潤率とをもたらすような仕方で，価値体系は価格体系に論理的に転化，もしくは『写像』されうるということである」(p. 6)．

ブローグは，マルクスの価値体系から価格体系への転化手続きを，線型生産モデルを使ったこの問題への接近方法や，Sraffian Marxists の議論を援用しつつ検討し，その論理

1)　本書からの引用にさいしては本文中にページ数のみを記しておく．
2)　ラカトシュ（1922—1974）はハンガリー生まれの科学哲学者．彼の科学的リサーチプログラムの方法論については後述．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

不整合性を主張している．

第2講義では資本主義の将来にかんするマルクスの予言が検討される．なぜなら「科学理論はその経験的予言と経験の事実との比較によってその最終分析を判定されなければならない」(p. 31) からである[1]．だがブローグは，マルクスの予言の検討にはいる前に，マルクスの方法について論じている．というのは，彼によればマルクスの予言の成否がその方法にかかわっているからである．ブローグはマルクスの方法を構成する要素としてつぎの7つをあげている．1. 仮説-演繹的アプローチ，2. 本質主義（本質と現象の区別），3. 弁証法，4. 関係主義（全体を「内的連関の集合」＝「構造」と考える），5. スコットランド歴史学派の方法＝唯物史観，6. 論理-歴史的命題，7. 社会理論の究極のテストとしての実践の概念．

ブローグはこれらのうち，本質主義 (essentialism)，関係主義 (relationism)，弁証法 (dialectical method) の三つを考察する．「これら三つはすべて強力な発見力のある公理，もしくは問題解決のためのアルゴリズムとみなされうる」(p. 34) からである（ただし，ブローグが主に問題にするのは本質-現象の関係である）．それにつづいて彼は，カール・ポパー (Karl Popper) の議論を援用して，本質主義批判の立場から生産的労働-不生産的労働の区別の問題に批判を加え，さらに崩壊論争，労働還元問題，窮乏化論や資本主義発展の将来コースにかんするマルクスの種々の予言（ますます増大する周期的失業，景気循環の振幅の増大，資本の集中，資本主義の地理的拡大，階級分化の増進，疎外の継続など）をとりあげている．

第3講義では『資本論』第4巻（もちろん『剰余価値学説史』のことであるが，ブローは終始「第4巻」という呼び方をしている）でのイギリス古典経済学の歴史，とりわけ利潤学説史のとりあつかい方が批判される．また，絶対主義と相対主義という経済思想史研究の両極的アプローチがとりあげられる．

III

ブローグは，ラカトシュの意味でマルクス経済学の評価を行なうとのべていたが，本書ではラカトシュの考え方にかんしてはほとんどふれられていない．そこで先に進むま

1) この点はラカトシュの立場とは異なる．後述参照．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

えにラカトシュの考え方——科学的リサーチプログラムの方法論（the methodology of scientific research programmes, MSRP）と呼ばれる——について簡単にのべておくことが適切であろう[1]．

カール・ポパーの科学方法論やトーマス・クーン（Thomas S. Kuhn）の科学革命論にかんしては，社会科学の領域——われわれがとりわけ関心をよせるのは，経済学史研究あるいは経済学方法論研究へのそれらの適用であるが——でもかなり注目されているようである．ただし，それらの原論争での諸問題がどれだけ自覚されているかは別にして．それに対して，I. ラカトシュの「科学的リサーチプログラムの方法論」（MSRP）については若干の紹介を除いて，これまでわが国で，少なくとも経済学の分野では，本格的に検討されてはいないように思われる[2]．

ラカトシュの考えはクーンの『科学革命の構造』（1962年）をめぐる論争のなかからあらわれてきたものであるが，彼の立場はポパーとクーンの両者の立場の「包摂」「接合」[3]，「批判的止揚」[4]，あるいは「折衷」[5]といわれている．ラカトシュによると，ある科学的リサーチプログラムは，その中心となる「堅い核（hard core）」によって特徴づけられる．たとえば，ニュートンのプログラムでは彼の力学の三法則と重力法則がそれである．そしてこの「堅い核」はそのまわりを補助仮説の「保護ベルト（protective belt）」でかこまれている．「この『核』はその提唱者の方法論的決定によって『反駁できない（irrefutable）』：変則例（anomalies）は『観察上の』仮説や初期条件という補助の『保護』ベルトのみを変化させるにちがいない．」[6]つまり，経験的（あるいは実験的）観察から出てくる変則例

---

1) Imre Lakatos, "Falsification and the Methodology of Scientific Research Programmes," I. Lakatos and A. Musgrave (eds.), *Criticism and the Growth of Knowledge*, Cambridge University Press, 1970, pp. 91—195.

2) 経済学の分野で最初にわが国でラカトシュを一般的に紹介されたのは佐藤隆三氏と思われるが，評者はラカトシュの考え方を理解する際，つぎの諸論稿に大いに助けられた．早坂 忠「連続史観と革命史観——最近の経済学史研究動向との関連で——」，伊東俊太郎「転換期における経済学——科学理論発展の構造に即して——」（いずれも，早坂 忠・伊東俊太郎・竹内 啓編『経済学の知性史的考察』（講座現代経済思潮 第1巻）東洋経済新報社，1979年所収）．

3) 早坂 忠，前掲論文，25ページ．

4) 伊東俊太郎，前掲論文，48ページ．

5) Mark Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, 3rd ed., Cambridge University Press, 1978, p. 717.

6) I. Lakatos, *op. cit.*, p. 133.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Mark Blaug, *A Methodological Appraisal of Marxian Economics.*

は，補助仮説＝保護ベルトの変更によって解消されるのである．そして「核」の変更は「観察によって少しも動機づけられるものではなく，そのプログラムを発展させるときの理論的困難によって動機づけられるのである．[1]」

ラカトシュは「科学の歴史はリサーチプログラム（あるいはお望みなら『パラダイム』といってよいが）の競争の歴史であり，そうであるべきだ[2]」という．それではリサーチプログラムの交替はどのように行なわれるのかというと，それは「あるリサーチプログラムが，そのライバルのリサーチプログラムのそれまでの成果を説明し，かつより一層の発見力（heuristic power）を示すことによってライバルにとってかわる[3]」ことによってである．この発見力，すなわち「あるリサーチプログラムがその成長のなかでこれまで知られていない事実を理論的に予想する力[4]」をもつとき，そのリサーチプログラムは「前進的（progressive）」であるといわれ，もはやそのような力を失ったとき「退歩的（degenerating）」であるといわれる．

同様のことをブローグは『経済理論の歴史』第3版でつぎのようにのべている．

「特定のリサーチ戦略，すなわち SRP はもしそのプログラムのそれにつづく諸定式が先行者よりも『余剰の経験的内容』をふくんでいれば，すなわちなんらかの新しいこれまで予期されなかった事実を予言するならば，『理論的に前進的』であるといわれる．それでもしこの余剰の経験的内容が確証されれば『経験的に前進的』である．これに反して，もしある SRP が，利用できるようになったどんな新しい事実をもたんに調和させるだけのアドホックな調節の際限のない追加によって特徴づけられるならば，それは『退歩的』というラベルをつけられる．[5]」

Ⅳ

ラカトシュの MSRP にもとづくマルクス経済学の評価にかんするブローグの議論の全体的な検討を行なう前に，個々の論点について少し疑問を出しておくことにする．

---

1) *Ibid.*, p. 135.
2) *Ibid.*, p. 155.
3) *Ibid.*
4) *Ibid.*, n. 3.
5) M. Blaug, *op. cit.*, p. 717.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

価値体系と価格体系の関連の重要性はあらためてブローグに指摘されるまでもない．彼は線型生産モデルや産業連関分析の出現が伝統的経済学からのマルクス経済学への見方を変えたといっている．それは線型生産モデルによって，物的な諸量，価値，価格の三つの区別と関連が明示的になったためである．この区別にもとづいて生産価格や利潤率をもとめる際に，価値（商品に体化された労働量という意味でのそれであるが）はいっさい役割をもたないということで労働価値説放棄論者にブローグは与するのである．だが価格（生産価格）計算に価値が必要ないということはマルクス経済学で価値論が不要だということを意味しない．マルクスの「搾取」はたんに正の純生産物の生産を回り道していっているだけだとブローグはいうが（p. 26），問題はなぜ労働によって生みだされた純生産物が資本家によって利潤という形で取得されるのか，資本家による利潤獲得が正当性をもってあらわれる諸関係の総体がいかなる存立構造をもっているのか，を明らかにすることである．その解明の基礎になるのがマルクスの価値論である．マルクスの価値は単なる計算上の集計因子ではないのである．

剰余価値率の均等化を批判するさい，価値や剰余価値が観察可能でないとしている点にかんして．ここでブローグが観察可能とか不可能とかいう意味がよくわからない．諸商品に体化された労働量の計算はそれこそ線型生産モデルによって方程式を解くことによって，必要な物的データさえ得られれば可能であることはマルクス批判家でも認めていることである．また剰余価値率均等化の論証に対してブローグは価格だけからその論証を行なえというが，その論旨がよく理解できない．観察不可能な――とブローグがいう――剰余価値率がなぜすべての産業で均等になるのかという問いに対して彼が紹介している論証はつぎのようである．労働は同質であり，一つの支配的賃金率と労働日の均等化があり，同一量の同質労働は同量の価値を生みだすということが前提されるならば，労働市場の競争の結果として剰余価値率は均等化する．この議論だけにかんしてラカトシュの考え方を適用するならば，「同一量の同質労働は同量の価値を生みだす」というのが「堅い核」であり，その他の諸前提は「保護ベルト」にあたるといってよいだろう．たとえばもし観察によって異質労働が存在するならば，同質労働への還元にかんする理論が「保護ベルト」に組みこまれて困難は解消するだろう．さらに，ブローグは，資本の有機的構成相違のもとで利潤率が均等化されたとき剰余価値率は不均等になるといっているが（p. 11），これは生産された剰余価値と獲得された利潤との混同にほかならない．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Mark Blaug, *A Methodological Appraisal of Marxian Economics.*

やや瑣末なことかもしれないが，二点ほど気がついたことにふれておきたい．

第一．本書で，マルクスはクールノー（A. A. Cournot）を読んでいたといわれている（p. 67）が，『資本論』第4巻にはクールノーにかんする記述はみあたらない．ただ「ヴァーグナー評注」[1]のなかにクールノーにかんする言及がみられるが，ヴァーグナー（A. Wagner）からの孫引きで，これまで公表されているかぎりマルクスがクールノーの著作『富の理論の数学的原理に関する研究』（1838年）を直接読んだ形跡はみあたらない．

第二．学説史上のリカード（D. Ricardo）のとりあつかいにかんする議論で，マルクスは，リカードは利潤の源泉に関心を持っていなかったといいながら，『資本論』第4巻には「剰余価値にかんするリカードの理論」という章や，「リカードが剰余価値と利潤とを区別している個々の場合」という表題の節があるとブローグはのべている（p. 68）．だがこの表題の後者の方は，同書編集のマルクス主義-レーニン主義研究所（モスクワ）によるものであり，マルクス自身がつけたものではない．

V

さて，ブローグがラカトシュの意味でマルクス経済学の評価を行なうといった一連の講義の全体的な評価を行なうことにしよう．

ある特定のリサーチプログラムを評価するときの判断基準は，一つはそのリサーチプログラムが「前進的」か「退歩的」かということ，すなわち「発見力」をもっているかどうかということ，もう一つは，それがライバルのリサーチプログラムと比較してどちらが豊富な内容をもっているかということであろう．

ところでブローグはこうのべていた．「マルクス経済学は，社会学，政治学および人類学さえをも包含するより広範なリサーチプログラムにはめこまれており，それらはすべてある歴史変化を決定づける理論によって相互に編みこまれている．そしてそのようなものとしてそのリサーチプログラムは相互に関連した諸理論の複合体として丸ごと評価されなければならない」（p. 2）と．このような作業はもちろん容易にできることではないし，ブローグもその点の限界はことわっている．複合体のうち経済学だけをとり出して議論することにマルクス主義者もとくに反対はしないだろう．しかしすでにみたように，ある一

1) マルクス「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」『マルクス=エンゲルス全集』第19巻，大月書店，1968年，354—385ページ．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

つのリサーチプログラムは中心となる「堅い核」とそれをとりかこむ「保護ベルト」からなっている．ところがブローグはマルクス経済学というリサーチプログラムにかんして，「堅い核」と「保護ベルト」の特定化は行なっていない[1]．また新古典派にしろケインズ派にしろ，マルクス経済学にとってライバルと考えられるリサーチプログラムと比較して「発見力」においていずれがまさるかという点の検討も行なっていない．だがブローグはつぎのように結論づけている．「マルクス主義リサーチプログラムは退歩した，そして腐敗をストップさせようとするいかなる試みもより一層の退歩を促進させるだけである．いずれかの時点において退歩的な科学的リサーチプログラムは消えさり，支持者をすべて失なうか，あるいはより進んだ経験的反駁のまさに可能性を排除することによってその威力を維持するという宗教的性格をもつかである．後者こそがマルクス主義の運命であることを立証しているのは明らかである．」(p. 70)．

ブローグがマルクス経済学を「退歩的」と結論づけるのは，主に資本主義の将来にかんするマルクスやマルクス主義者の予言が経験によって反証されているという点だけをとらえてのことである．しかもそれは一時点かぎりの評価でしかない．これはラカトシュではなくポパーの立場ではないだろうか．マルクスの予言が変則例によって一時点で反証されたとしてもそれだけでマルクスのリサーチプログラムが棄却されるわけではない．ラカトシュの立場では，ある理論は実験，経験，観察事実などによってのみ反証されるのではない．他のより豊富な発見力をもった理論によってのみ反証されるのである．「よりよい理論の出現の前には反証は存在しないのである[2]．」

ブローグは「マルクス主義は西欧では知的力としては死にたえてしまった」(p. 58) というが，評者にはむしろ反対に，その力を復活させ，ますます拡大，前進させていると思われてならない．

VI

クーンの科学革命論にしろ，ラカトシュの MSRP にしろ，それらはいずれも第一義的には自然科学にかんするものである．ラカトシュは彼の MSRP の社会科学への適用可能

1) 新古典派経済学あるいはケインズ経済学の「堅い核」や「保護ベルト」にかんするブローグのとらえ方については，Blaug, *op. cit.*, pp. 721—722 を見よ．
2) Lakatos, *op. cit.*, p. 119.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

性を予想していたようだが[1]，それらが他の分野にとりこまれたとき，元来の議論からは離れて，たとえばクーンの「パラダイム」のようにそれだけが一人歩きする傾向がある．クーンのパラダイムにかんしては，彼の『科学革命の構造』(1962年）が出てすぐ科学史家のあいだで，その中味のあいまいさや，諸パラダイム間の比較について種々批判がなされ，クーン自身自分の考えをかなり後退させたというような事情もある[2]．だが，そのような事情とはかかわりなく，パラダイムということばがいったん他の分野にはいりこんでくるとそのことばだけが安易に使われることになる．

社会科学と自然科学では研究対象のちがいにより，共通する面もあるかもしれないが，その研究方法はおのずと異なるはずである．社会科学の研究において自然科学の方法なり概念を利用するときでも，それによっていままで気づかなかったことが見えてくることもあるかもしれないが，それらを社会科学の土壌のなかでもう一度鍛えなおして用いる必要があるのではないだろうか．　(1980. 9. 23)

〔付　記〕

ラカトシュの著作目録が，彼の主要論文を収めたつぎの二冊の本のいずれにも収録されている．

Imre Lakatos, *The methodology of scientific research programmes* (*Philosophical papers* Volume 1), ed. by John Worrall and Gregory Currie, Cambridge University Press, 1978.

do., *Mathematics, science and epistemology* (*Philosophical papers* Volume 2), ed. by John Worral and Gregory Currie, Cambridge University Press, 1978.

ラカトシュの著作の邦訳としては，佐々木 力訳『数学的発見の論理――証明と論駁

---

1) ラカトシュによって計画された Nafplion Colloquium on Research Programmes in Physics and Economics が，1974年ギリシアで開催された．経済学にかんする報告は，コロキアム以後にかかれた論文をふくめて，S. J. Latsis (ed.), *Method and Appraisal in Economics*, Cambridge University Press, 1976 におさめられている．

2) ラカトシュの前掲論文をふくむ書物（本稿63ページ脚注1参照）は，クーンの著作をめぐる，ラカトシュによって組織された国際的コロキアムの報告の記録である．最近の科学史研究の動向については，村上陽一郎 編『科学史の哲学』(知の革命史1）朝倉書店，1980年参照．

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Mark Blaug, *A Methodological Appraisal of Marxian Economics.*

——』共立出版株式会社，1980年（I. Lakatos, *Proofs and Refutations: The Logic of Mathematical Discovery*, ed. by John Warrall and Elie Zahar, Cambridge University Press, 1976の訳）がある．なお上記の論文集の邦訳刊行も予定されているようである．

NII-Electronic Library Service